

〈書評〉

嶋根克己・藤村正之 編著『非日常を生み出す文化装置』

北樹出版, 2001年, 196頁, 2,400円.

周藤 真也

「文化には生活世界を2つに分割して考える二分法的な『切断』をもたらす働きがあり、さらに生活世界は『日常-非日常』という限定的な時空間に分割して理解されることがある」(嶋根克己による「序」[11] =本文からの引用・本文への言及はページ数を [] に囲んで示す、傍点は原著者)。「われわれの生活世界のなかで、『日常的な時空間』を『非日常的な時空間』に、あるいは逆に『非日常的な時空間』を『日常的な時空間』に変換させている仕掛けを、『(日常と)非日常を生み出す文化装置』という言葉で呼ぶ」[11] (傍点は原著者)。

本書は、最初の2つの章、すなわち第1章「非日常を生み出す文化装置」(嶋根克己)および第2章「現代社会における日常/非日常の構図」(藤村正之)において「日常/非日常」を対象とする社会学的な分析視角が語られる。第3章「音楽は非日常を作り出すか」(小川博司)は、日常/非日常を作り出す文化装置としての音楽が語られる。そこでは、非メディア社会における非日常と結びついた音楽体験に対して、現代のメディア社会において音楽体験は日常的なものとなっていることが指摘され、メディア社会における日常と非日常との重層性あるいは日常と非日常の境界を攪乱するものとしてのメディアの様態を見て取ることができる。第4章「『社会』を喪失した子どもたち」(土井隆義)は、少年犯罪を題材としながら、進歩観念すなわち「社会発展」という非日常の産出装置をもっていた近代社会に対して、現代の日本を自己の外部のフロンティアを見つけていけない「高度飽和社会」として分析したものであり、新しい「禁欲のエートス」として自己の内なる世界に「非日常性」を生み出すことが求められてきていることを指摘する。第5章「メディア消費化する海外旅行~バックパッキングという非日常」(新井克弥)は、若者のバックパッキング

という海外旅行のスタイルを取り上げ、かれらが楽しみながら「個性」や「独自性」を発揮し、「自己」を発見することに意義を求めていることを明らかにする。しかし、そうしたかれらの非日常への脱却も情報化されたシステム社会のなかでは消費される対象であり、「自由だけれども自由ではない」ことへのフラストレーションが潜んでいる。第6章「〈食〉という文化装置」(山脇千賀子)は、ベルーと日本という異なった社会における〈食〉に注目することを通して、ローカルな保守性とむすびついた「日常食」の世界に対して、エスニック料理が受け入れられるときといった「野蛮な」食欲を取り上げながら、快楽としての〈食〉と〈生〉の様態を考察したものである。第7章「都市空間における墓地」(松本由紀子)は、「非日常」の空間としての墓地を取り上げ、イタリアの4つの墓地空間における生者と死者の関係性を比較考察しながら、そこに死者たちの共同体と己の死を私有する個人という2つの論理を見出し、墓地空間の「非日常」性が死者の絶対的領域から、現代においては解放されたと論じている。最後に第8章「グロテスクなものとしての始原的世界」(小川亮)は、非日常が喪失の物語として語られる側面を、グロテスクな「未開」として、文化人類学からの理論的な応答として論じられている。

このように本書は、「非日常を生み出す文化装置」をモチーフにして8名の執筆者たちがそれぞれの題材を各々の立場から分析したものである。しかしながら、序において嶋根が言及するように「『日常-非日常』という基本概念の設定や、現代社会における『非日常』のはたす役割について、必ずしも執筆者相互の見解の統一が図られていない部分もある」[14](傍点は原著者)にもかかわらず、2名の編者を含む何人かの執筆者たちの多くは、現代社会という枠組みにおいて共通した認識をもっているように思われる。すなわち、現代社会における非日常の日常への包摂、あるいは日常/非日常の相互浸透という見解とそれに基づいた分析と記述は、むしろ本書を貫くテーマになっているといっても過言ではない。

たとえば編者のひとりである藤村は、本書において次のような整理を行っている。「定義上、非日常は日常が包み込みえず、それを超え出るものであるがゆえに、文字通り、“日常でないものが非日常”であったわけなのだが、高度消費社会において従来非日常とされた出来事が文化装置として偏在することによ

て、非日常は日常に包含されてしまい、“非日常でないものが日常である”というような逆転した関係が作り出されてしまった。しかし、いったん日常に包み込まれた非日常であるが、今度は再びそれが反転して、顕在化しない多層性や流動性の亀裂のなかにこそ日常は起こり、計算しつくせなかった失敗のなかにこそ、積極的な非日常の異化効果が起こりうる」[51-2]。藤村はこれらを「A 日常／非日常の二項対立的状況」、「B 日常の全域化と非日常の偏在」、「C 非日常の入れ子構造的関係」の3つの形態にまとめて図示 [52] し、Cの非日常が日常の内部と外部に共存するような包含関係を現代社会の特徴としたので捉えたのである。

だが、本書の最後の章で小田は、文化人類学において非日常が語られるようになった文脈を歴史的に問うことによって、こうした社会学が行いがちな前近代／近代あるいは近代／現代の切断に基づいた二項対立的な視角に対して一石を投じている。小田によれば、「『非日常』というものは常に自分たちの社会から失われたものとして語られてきた。そのことは、『非日常を生み出す文化装置』について語ることの効果は、じつは自分たちが生きている現在を『非日常を生み出さない世界』として語ることにあるのではないかという感じすらいがかさせる」[178] というのである。小田はこうした言説をモダンにおけるものとポストモダンにおけるものとに区別する。「モダンにおける非日常の喪失の物語は、近代社会が非日常をその公共空間から追放してしまったために、日常生活から生の全体的な意味が奪われて硬直化し、生産的労働のための効率と規律の牢獄となってしまったという近代批判として登場した」[179]。と同時に、そこでは「近代において非合理的なものとして排除されてしまった祝祭や儀礼における秩序の象徴的転倒や境界侵犯といった、なんらかの『非日常を生み出す文化装置』が不可欠であると主張する」[178-9] ことを伴っている。それに対して、「ポストモダンにおける非日常の喪失の物語は、日常と非日常の区別の喪失の物語となっている」[179]。そこには、「非日常が日常から排除されたために失われたというよりも、日常のなかに包摂されて区別できなくなったために消えたのだという主張」[179] が含まれており、前近代の文化が「非日常を生み出す文化装置」をもっていたという認識に対して、それは「近代の公共空間における日常のエキゾチックな逆転像」[179] であるとしてモダンの言説へ

の批判となっているというのである。

この小田のまとめをもとにすれば、本書の現代社会を捉える視線は、小田のいうポストモダンにおける非日常の喪失の物語と重なりながらも、もはやモダンの言説への批判を伴わないという意味においてそれを超えている。しかしながら、日常のなかに非日常が包摂され区別ができなくなってしまったという認識を、現代社会を捉える「社会学的」視角へと転換するとき、本書はある排除を行うことになる。すなわち、日常のなかに非日常が包摂され区別ができなくなってしまったという事態があるのならば、そのような事態すなわち非日常との境界線を引けなくなった日常（いや正しくは日常との境界線を引けなくなった非日常となる）があるだけなのに、そのような事態それ自体を排除していくことになるのだ。たとえば、本書の編者のひとりである嶋根は、「日常」と「非日常」という二項対立的な記号のセットが現代社会においては意味を喪失してしまったとい議論に対して、「『日常』と『非日常』の区分が曖昧化、あるいは無意味化することがあっても、われわれは新たな二項対立的な意味の領域を作り出しつづけるに違いない。あるいはわれわれが、記号的操作を用いながら物事を認識する限り、……二項対立的なコードによる準拠枠は今後も機能し続けることだろう」[35]と述べることになるのである。

このような言説それ自体が間違っているわけではない。注意すべきなのは、このような言説が、二項対立的な記号のセットが意味を喪失してしまうような領野があるという事実＝可能性を排除する言説にもなりうることにある（たとえば藤村は先に紹介したまとめの図示において、日常＝非日常が同値となる様態を含めない）。このような言説は、ポストモダン以後（ここでいう「ポストモダン」とは、本書の文脈において日常と非日常の区別の喪失の経験ということになるだろう）の社会学的記述のある典型的な方向性を指し示している。すなわち、日常と非日常との相互浸透であるとか、藤村のいう「入れ子構造」であるとかを丁寧に記述することに徹するという方法は、こうした喪失の経験を前にしていればモダンの側（日常と非日常とを峻別する側）へと立ち戻り、その中ですべてを構築しようとする態度でもある。そこでは、「日常／非日常」とは、まさしく藤村が言うように本書を構成する「概念装置」となる。それは学問上の「文化装置」として社会学的記述のあり方を支配し、そして日常性（い

わゆる生活世界)の下へと還元されることにおいて、政治性を帯びてしまう。しかしながら、本書はこうしたある種の政治性を伴っていることにいささか無自覚ではないだろうか。

たとえば小川は、阪神・淡路大震災の2、3週間後に、大阪の友達の所で音楽を聞いた神戸市内の学生が「大阪は神戸とは違い普通の生活をしている」と感じた経験の事例を取り上げて、「ここには音楽、とりわけポピュラー音楽が流れている状態こそが日常であるという意識を見いだすことができる」[76]という。しかし、その記述は十分なものではない。震災地に暮らすこの学生にとっては、音楽が流れていない「非日常」な状態が日常のものとなっており、したがって音楽が流れている状態こそが非日常のものとなっているのであり、それは音楽=普通の生活=日常という図式そのものがすでに否定されている世界に住んでいるにもかかわらず、そのことを語らないのである。

もちろんこのことは、本書における小川の記述を否定するものではないし、記述の対象者(この場合であればその学生)に寄り添った記述であるともいえるだろう。だが、ここで指摘しておかなければならないことは、「日常/非日常を生み出す文化装置」がひとつの文化装置であると同様に、何を「日常/非日常」とするかということにおいて、そのこと自体もまたひとつの文化装置であるということである。そして、日常/非日常の切断は、それが正常/異常という切断を伴うことによって、価値判断としての性格を帯びることになる。たとえば、先の小川の記述であれば、そこではその学生がおかれている現在の状況が「異常」であるという認識(もちろんこうした認識は当のその学生ももっているだろう)が当事者に即くようにして挿入されているからこそ可能な記述であるのだ。

本書のなかで土井は現代の日本を「『非日常を生み出す文化装置』の破綻した社会」[82]と捉え、少年犯罪にみられる「他者に対する想像力の欠如」を「社会に対するリアリティの崩壊を物語っている」[94]と分析している。そして、これらのことがらを「非日常としてのフロンティアを絶えず発見し、その開拓をつうじて生存の境界を拡張しつづけ」[106]てきた近代社会に対して、その行き詰まりに対する警告として捉えている。しかし、この分析には「病理」の認識がつきまとっている。もちろん、そこには価値判断は含まれないと言うこ

とは可能である。すなわち、病理であるといわれているものをただ単に社会的に分析することそれ自体には、価値判断は含まれてはいない。だが、そうして価値判断を請け負う主体を社会学者の側ではなく社会の側に置こうとも、そのことはまさに社会学的な記述を行う上で無効になっていってしまう。なぜなら、そうして記述しようとする者は、まさに記述するという点においてその当の社会のもつ（何を「日常／非日常」とするかという）文化装置を請け負ってしまわざるを得ず、間接的にその価値判断をも請け負ってしまうことになるからだ。

ここにおいて今ひとつ指摘しておきたいのは、土井が行った欠如の言説（他者あるいは社会に対する想像力の欠如）は、当の対象に照らし合わせてみるならば、そのとたんに適切な表現ではなくなることである。すなわち、想像力が欠如しているところに、そうした想像力はないのだから、それは想像力とはならない。当の対象者の経験世界において、それは欠如としては現れない。だから、そのような想像力は欠如しているのではなく、単にはじめから存在すらしていないのである。このことは、こうした欠如言説において、かれらのいう「他者」という概念が、誰が誰にとっての他者であるべきなのかということにおいて、はじめからある価値観に基づいたものであることを示している。そして、そこでは別の形の他者や、別の形の社会がはじめからそこに存在している可能性をはじめから排除するものとなっている。そうした意味において、「他者に対する想像力」が欠如しているのは、それが欠如していると言われる側ではなく、そうした欠如がそこにあると主張する側にあるかもしれないのである。

最後にこうした認識は、臨床社会学というあり方において、きわめて重要なものになることを指摘しておこう。「病理である」「異常である」という認識だけでは、そうした事態を「反復」し「強化」するばかりであることは、ラベリング論を知る社会学者であればすぐ思い至るだろう。そうした認識から脱却するためには、「異常」をそっくりそのまま「正常」とするような認識に基づいた価値転換が必要になる。そうした認識は、嶋根が日常／非日常のあり方で指摘したように、正常／異常というあり方においても、いずれ排除されていくとみることではできるだろう。だが、そうした認識の存在、それ事態は排除されるべきではない。われわれにいま求められているのは、日常－正常／非日常－異常

という同値性は常に確保されなければならないという事態なのである。

そうした意味において本書は全般的に日常／非日常の切断に対して、「古典的」な認識のうちにとどまっている。したがって、別の形の日常の可能性、そして日常－非日常の同値性を確保することこそ、本書に残された課題であるのかもしれない。それは、前近代－近代あるいは近代－現代という切断を用いない、社会学的想像力を近代という「大きな物語」から切り離すことにおいてしかない。

なお、本書は1996, 97年の関東社会学会大会におけるテーマ部会「日常と非日常」における研究活動を発端としている。関東社会学会のテーマ部会は、2年の役員任期にあわせて2年通したなかで構成が可能になっており、6月の大会時におけるそれと、それに向けた研究例会（12月～3月）とをセットとしながら行われるため、ひとつ研究プロジェクトと言ってよいかもしれない。本書に収録された論文の多くは、テーマ部会および研究例会における報告がもとになっており、そうした意味において本書がその研究成果として公開されたことは、日本の社会学界における学会活動、とくに研究活動において高く評価されるであろう。

（すとう しんや／筑波大学）